

# 生 活 科

中 川 好 美

## 1 生活科における「考える子」

生活科では、子どもが充実した活動や体験を通して思いや願いをもつこととともに、そこで生まれる気付きを大切にしている。子どもは、身近な対象である「ひと・もの・こと」とかかわる直接体験を通して、没頭したことや思わぬ発見をしたこと、不思議なことなどを表現しようとする。言葉を獲得していく最中である子どもは、実感を伴った言葉を使って友達や教師に自らの思いや願い、気付きを伝える。それが認められることで、自己表出する楽しさを経験し、さらに言葉を増やし豊かにしていく。そして、言葉だけではなく、絵や動作化、劇化などの方法による表現からも思考を深めていく。

本校の生活科においては、見付ける、比べる、たとえる、ふり返る、試すなどの学習活動をくり返す中で、友達と交流し互いの思いや願い、気付きを共有する。そうすることで、自覚していなかった気付きをとらえ直したり、一つ一つの気付きを比べて考えたりすることができ、価値のある気付きが広がる。また、気付きと気付きを関連付けることで、新たな気付きが生まれ、もう一度対象とかかわることから自分自身への気付きを得ることにつながっていく。つまり、無自覚なものから自覚された気付きへ、一つ一つの気付きから関連付けられた気付きへ、対象への気付きから自分自身への気付きへと、気付きの質が高まっていくのだ。このように、気付きの質が高まることで、子どもはさらに意欲的に対象とかかわり、考え、活動するのである。

以上のことから、生活科における「考える子」を次のようにとらえる。

「ひと・もの・こと」とかかわる中で生まれる 実感を伴った気付きを 友達と交流し 共有することで さらに強く思いや願いをもち くり返しかかわりながら 気付きの質を高めていく子

## 2 学ぶ楽しさを味わう生活科の授業

学ぶ楽しさを味わう生活科の授業では、子どもが頭と心と体を活発に動かせながらもった気付きを友達と交流し、互いに思いや願い、気付きを受けとめ合う中で、「えっそうなの?」「知らなかつた」という驚きや発見、「なるほど」「やっぱり」という納得、「なぜ?」「どうして?」などの疑問が生まれる。その際、共通点や相違点、自分にはなかった視点に気付かせる。そうすることで、子どもは「どうやったらできるのか?」「どう工夫したらいいのか?」という「問い合わせ」や、「もっとよくしたい」「もっとできるようになりたい」という「こだわり」をもつことができる。それらを共有し解決していくことが学ぶことへの意欲や、学ぶことの満足感や達成感につながる。このように、気付きの共有と強い思いや願いに基づいた活動がくり返し展開されることで、子どもは「こだわり」をもって考え、対象とのかかわりを深め、気付きの質を高めていくことができるのだ。

そこで、学ぶ楽しさを味わう生活科の授業では、以下の三つの学ぶ楽しさを重視する。

- ①自分の思いや考え方などを適切な方法で表現し、気付きを深めたり広げたりする楽しさ。
- ②自分の気付きに対する共感を得たり、自分にはなかった気付きを友達と共有したりしながら、ともに活動する楽しさ。
- ③主体的に活動することができた満足感や、試行錯誤しながら活動することができた達成感を感じ、自分の成長に気付く楽しさ。

学ぶ楽しさを味わう授業を積み重ねることによって、子どもはさらに強く思いや願いをもち、活動に没頭しながら学習することができ、「考える子」が育つのである。

### 3 「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて

#### (1) 思考と表現をくり返す場の設定

低学年の発達段階において、子どもが具体的な活動や体験をする中で生まれる気付きが無自覚であったり、不明確であったりすることがよくある。また、長期的な単元が多いため、目的意識や相手意識をもち続けることが難しい。

そこで、子どもの思いや願いに沿った学習活動が展開できるよう、子どもとともに単元全体の目的をつくり共有する。そうすることで、子どもはその目的に向かって見通しをもち、本時での学びを次の活動や体験につなげていくことができる。また、その学習過程で活動や体験をふり返り、言葉や絵、動作化、劇化などのさまざまな方法で表現させることで、子どもは自分の思いや願い、気付きを整理することができる。自分自身の気付きが明確なものになると、比較・分類しやすくなり、友達との共通点・相違点にも気付きやすくなる。そこから新たな「問い合わせ」「こだわり」が生まれ、単元全体の目的に向かって自分の「こだわり」を追究する中で、気付きが深まったり広まったりし、思考を深めていくのだ。このように、思考と表現をくり返しながら活動する中で、子どもは学ぶ楽しさを味わうことができる。

#### (2) 伝え合い交流する場の工夫

体験したことや調べたことを伝え合う場において、活動形態を工夫し、さまざまな思いや願い、気付きに触れるができるようにする。ペアやグループなどの少人数での活動では、一人一人が主体となり、自分の思いを表出する場が保障される。思いや願いをもとにしたグループ、または使用する材料や素材ごとのグループなど、意図的にグループをつくることによって、同じ目的に向かって考えを出し合い、思いや願い、気付きを交流することができる。その中で、「そんな工夫もできるのか」と自分にはなかった考えに触れ、新たな視点を増やすことができる。このように、お互いの思いや願い、気付きを受け止め合い、自分の気付きに対する共感を得たり、自分にはなかった気付きを友達と共有したりすることで、子どもは学ぶ楽しさを味わう。

また、その活動形態の組み合わせ方を工夫することも有効である。全体の活動の後にグループ活動を設定することで、子どもは見通しをもち安心して活動することができる。グループ活動の後に全体の活動を設定することで、そのグループならではの気付きを全体で共有することができる。それぞれのよさを次の場で生かして活動することで、友達とのかかわりを深め、ともに学ぶことのよさを実感することができ、学ぶ楽しさを味わうことができる。

#### (3) 目的を意識させたふりかえり

生活科では、対象とくり返しかかわりながら気付きの質を高めていく。また、その対象から得た気付きを自分自身への気付きへと高めていく必要がある。例えば、活動後には自分の満足度をシールの色で表現させ、単元全体の大きな目的を意識させながら、その理由を考えさせる。また、学習履歴の掲示、学習過程を想起させるような映像や写真、蓄積してきたワークシートなどの視覚情報により、子ども自身が自分の活動の様子を明確にとらえることができるようとする。そうすることで、単元全体の目的や本時の課題等に実際の活動の様子を照らし合わせながらふり返ることができ、子どもは満足感や達成感を味わったり、自分の成長を認識したりする。さらに、自分のよさや可能性について気付くこともできる。「もっと～したかったのに」などの不足感を味わった場合には、それが次の活動に向けての「こだわり」や意欲となる。

このように、目的を意識させたふりかえりをすることによって、自分の成長に気付くことができ、学ぶ楽しさを味わうことができる。

## 1年生「なつだ あそぼう ~じぶんだけの〇〇しゃぼんだま！～」の実践から

本単元は、シャボン玉遊びやシャボン玉遊びに使う物を工夫することで、シャボン玉の不思議さや面白さに気付き、友達と遊びを楽しむことができることをねらいとしている。そこで、「本単元でめざす学ぶ楽しさ」を「シャボン玉遊びやシャボン玉遊びに使う物を工夫して作る中で『〇〇シャボン玉を作りたい』という思いや願いを強くし、シャボン玉の不思議さや面白さを実感しながら遊びに没頭する楽しさ」と設定した。以下に、A児の学ぶ姿を中心に実践を述べる。

## (1) 思考と表現をくり返す場の設定

## 単元全体の目的をつくり共有する

本単元では、子どもがこだわりをもち続けながら学習を進めることができるよう、単元全体の大きな目的を子どもとともにつくり共有した。第一次の吹き棒を使ってのシャボン玉作りを共通体験とし、第二次では「もっと〇〇なシャボン玉を作りたい」という一人一人の思いや願いを出させ、その実現に向けてこだわって活動できるようにした。さらに、シャボン玉遊びに使用する道具を全員共通の吹き棒から、ストロー、さまざまな道具へと段階的に広げていくことで、工夫する視点を明確にしたり、得た気付きを次に生かしたりしながら活動することができるよう単元を構成した。そうすることで、自分のめざすシャボン玉作りに向けて、試行錯誤しながらくり返し活動することができると思ったからである。

A児は、単元全体の大きな目的を「自分だけの数字シャボン玉を作ろう」と設定し、活動に取り組んでいた。<ストローを使って「自分だけの〇〇シャボン玉」を作ろう>の場面では、ストローの口に放射状に切り込みを入れ、体を上下に動かしながら吹いていた。A児に「どうして体を動かしているの？」と尋ねると、A児は「数字の『1』を体で書いているの。」と答えた。A児は「シャボン玉の形」と「体の動き」とに関係があると考えているようだった。鉛筆で字を書くように体を動かせば、そのような形のシャボン玉ができると考えていたのだ。しかし、何度も試してみても、シャボン玉は丸くなるばかりで、A児の思うような数字シャボン玉はできなかった。

資料1は、A児の活動後のふりかえりの一部である。今回の活動では、数字シャボン玉を作ることはできなかったが、道具を変えたら数字シャボン玉ができるかもしれないという次の活動への意欲が感じられる。

○7月4日（月）…ストローでのシャボン玉作り  
…（略）…すうじのかたちは、むずかしかったけれど、ほかのしゃぼんだまができたのでよかったです。ほかのどうぐで、すうじのかたちをつくりたいです。いろいろむずかしいどうぐでも、しらないどうぐでも、すうじのかたちをつくりたいです。

資料1 ストローでのシャボン玉作り後の  
A児のふりかえり

○7月14日（木）…いろいろな道具でのシャボン玉作り  
…（略）…せっかくつくったしゃぼんだまをこわされたり、みずぎにもついたし、すうじのかたちもできなかつたので、ざんねんであおにしました。でもなつやすみになつたら、いいあどばいすをつかって、おうちのそとでやってみたいです。2がっきにまたしたいなとおもっています。

資料2 いろいろな道具でのシャボン玉作り後の  
A児のふりかえり

次の時間、いろいろな道具を使って「自分だけの〇〇シャボン玉」を作ろう>の場面では、資料1のふりかえりの通り、うちわのほねやトイレットペーパーの芯などを使って、数字シャボン玉作りをした。しかし、やはりその時間にもA児の思うような数字シャボン玉はできなかった。

資料2は、その日のA児の活動後のふりかえりの一部である。今回の活動でも数字シャボン玉はできなかったが、友達からのアドバイスを生かしたらできるかもしれないという次の活動への意欲や、数字シャボン玉を作ることにこだわりをもち続けながら活動していることがわかる。

資料3は、最後のシャボン玉作りのA児の活動後のふりかえりの一部である。今までの活動をふり返り、自分の作りたかった「数字シャボン玉」を作るには、ストローを何本か束にしたものを使うとできるという気付きが書かれている。シャボン玉に使う道具を全員共通の吹き棒、ストローからいろいろな道具と段階的に広げてきたが、最後の活動でA児は再びストローを使って数字シャボン玉作りをしている。このことから、それぞれの道具を試して得た気付きから、数字シャボン玉を作るのに適した道具としてストローを選択したのではないかと考える。また、「今までずっとできなかつたけど、最後の最後でやっとできた」という達成感や満足感を味わっていること、さらに難しかった数字についても今後挑戦してみたいという意欲をもっていることから、「数字シャボン玉を作りたい」という願いを強くもち続けながら活動することができたことがわかる。

これらのことから、単元全体の目的を子どもとつくり共有する、道具を全員共通のものから段階的に広げながら単元を構成するという手だては、A児が学ぶ楽しさを味わう上で有効であったと考える。

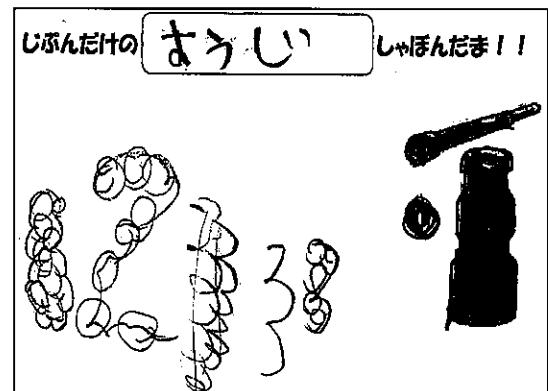
#### 言葉や絵、動作化、劇化などのさまざまな方法で表現させる

<ストローを使って「自分だけの○○シャボン玉」を作ろう>の場面では、A児は数字を書くように体全体を動かしながらシャボン玉を作っていた。そのA児の体の動きから、A児の作りたい数字シャボン玉は、「1」ならば縦に長細い形のシャボン玉、「2」ならば曲がりくねった形のシャボン玉というように、数字の形が一つの膜で形作られているシャボン玉だと教師は理解していた。しかし、実際に作ることのできる形は大体決まっており、「ゆきだるま」「さくらんぼ」「ぶどう」など、丸が基本となる形なら工夫して作ることができる。そのようなシャボン玉の性質についても、活動をする中でA児自身が気付いてほしいと考えた。そこで、数字シャボン玉がどんなものなのかを可視化することで、A児自身のイメージを明確にできると考えた。さらに、実際にできたシャボン玉とイメージ図とを比較する中で、自分の作りたいシャボン玉は実現可能かどうか、どのような工夫をすればよいのかが考えやすくなるのではないかと考えた。

資料4は、A児の「数字シャボン玉」のイメージ図である。A児の描いたシャボン玉は、教師の想像していたものとは異なり、小さなシャボン玉が寄せ集まって数字の形になっているシャボン玉であった。イメージ図を描くことで、A児は自身の願いが明確になり、自分の作りたいシャボン玉がどんなものなのかを友達にくわしく話す様子が見られた。また、イメージ図があることで、A児の願いが友達に伝わりやすいこともわかった。そこで、イメージ図をもとに自分の気付きと友達の気付きを比べたり、関連付けたりし、試行錯誤する中で気付きの質を高めていってほしいと考え、(2)伝え合い交流する場の工夫の手だてと合わせて実践することにした。

○7月15日（金）…最後のシャボン玉作り  
…（略）…さいごのさいごで、ちいさいす  
とろうがいっぱいくついているすとろう  
だと、すうじのかたちができました。できた  
ときは、すごくうれしかったです。123の  
しゃほんだまがきました。8とか9とかは、  
むずかしかったです。けど、123はできた  
のでうれしかったです。おうちでやってみます。  
しゃほんだまをやってきて、すうじのか  
たちができたのは、きょうだけでした。だか  
ら、だいまんぞくでした。なつやすみちゅう  
もおともだちとしゃほんだまをしたいです。

資料3 最後のシャボン玉作り後の  
A児のふりかえり



資料4 A児のイメージする  
「数字シャボン玉」

### 3 「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて

#### (1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

感動やあこがれを感じさせる音楽との出会いから「すてきな曲だな、もっと聴いてみたい」「どうしたらこんなふうに演奏できるのかな」「こんなふうに演奏を工夫したい」などの「問い合わせ」や「こだわり」が生まれる。その「問い合わせ」や「こだわり」を追求していくためには、曲の表現のよさが伝わるような演奏や映像と出合わせ、子どもにゴールの演奏のイメージをもたせることが大切である。

教師は、子どもが音楽のよさを追求し続けられるように、子どもの実態や発達段階、既習内容を見極めながら、子どもの琴線をゆさぶる題材と出合わせていく。また、様々な演奏や映像の中から子どものゴールのイメージに合い、「表現したい」という意欲が高まるものを吟味することが大切である。

高学年やゲストティーチャーによる生演奏なども表現へのあこがれにつながり、自分たちもこんな演奏をしてみたいという音楽との出会いとなる。

#### (2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

子どもがイメージする演奏に近づくために、その音楽のもつよさを音楽的な要素に着目して思考・判断し、表現を試行錯誤することによって、深く感じ取ったり、次の表現に生かしたりしていくことができる。意欲をもって表現活動に取り組み、よりよい表現を追求していくためには音楽表現に対する互いの思いや意図を、言葉や音で表現し交流させることが大切である。

表現においては、「イメージに合った音色にするにはどうしたらいいのかな?」「バランスのとれた演奏にした方がいいよ」「強弱を工夫することで感じが変わるよ」などと、実際に音を出して表現の工夫をしながら、互いの表現を聴き合い、自分の表現の思いや意図を言葉で伝え合う。その活動をくり返すことで、互いの表現を見直し、さらに自分のイメージに合った表現に生かしていくことができる。

鑑賞においては、自分が感じ取った曲の特徴を音楽的な要素と結び付けて思考・判断し言葉で伝え合い、伝え合ったことを実際に聴いて確かめることをくり返していく。このことが、今まで気づかなかつた曲の特徴に気付くことになり、より音楽のよさを味わって聴くことの手だてとなる。

授業のねらいに応じて個別学習、ペア学習、グループ学習を取り入れ、子ども同士が互いに思いを伝え合い学び合う形態を工夫する。

#### (3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

自分の思いや意図をもって表現してきた子どもは、自分の成長を自覚することで次の目標に向かって、新しい表現をつくり上げていく。

試行錯誤してつくってきた自分の表現を、友達と互いに聴き合う発表の場を設定する。自分の表現の工夫したところを認めてもらったり、友達の表現と自分の表現を比較し、自分の表現のよさに気付いたりすることで、自分の成長を自覚し変容を認識することができる。

音楽は視覚でとらえにくく瞬時で消えていくため、自分の成長が作品として残らない。自分の成長を自覚するための手がかりとして、録音を聴き直す活動や録画したものを見聴する活動を取り入れることもできる。これによって子どもは、はっきりとした変容を認識し、自分の成長を自覚できる。また、子どもの意識が変容していくことを自覚させるためには、自分自身を振り返った内容を目に見える形で残していくことが有効な手だてとなる。

聴き取ったことや感じ取ったこと、創作したことを表すために絵譜や図形楽譜、ワークシートなども活用していく。

## (2) 伝え合い交流する場の工夫

「自分だけの○○シャボン玉」という単元全体の大きな目的を共有した後、作ってみたい「○○シャボン玉」に対する思いや願いごとにグループを編成した。そうすることで、お互いの気付きを共有し生かしやすくしたり、友達と協力したり、競い合ったりして活動する楽しさを味わうことができると考えたからである。さらに(1)でも述べたように、自分の気付きを整理することができるよう、そして自分の気付きと友達の気付きを関連付けて考えることができるように、活動後に見つけたことを色別の付箋（うまくいったこと：ピンク色、うまくいかなかったこと：水色）に書くことにした。そして、それらを分類することで、新たな気付きが生まれるようにした。



資料5 付箋をもとに  
グループで話し合う様子

他の友達ともそれぞれのシャボン玉のイメージを共有することにした。そして、他のグループにアドバイスしたいことが見つかった場合には、黄色の付箋に書くことにし、それぞれが描いたシャボン玉のイメージ図にその付箋を貼るようにした。すると、子どもは「アドバイスしたいことある！」と何枚も付箋を書き、友達のイメージ図に貼っていった。自分の見つけたことが友達の役に立つかもしれないとわくわくしていたのだ。



資料6 アドバイスが書いてある付箋

まり、A児は、友達からのアドバイスをもとに自らの気付きと合わせて思考し試すことを通して、自分の願いを実現させたのである。

これらのことから、イメージ図や付箋を用いて気付きを可視化させることは、自分の気付きを明確にしたり友達と共有したりしやすくし、気付きを広げ、新しい気付きを得るために手だてとして有効であることがわかった。そして、それらを深めるためには、グループで同じ願いをもつ友達と話し合いの場を設けたり、違う願いをもつ他のグループの友達からアドバイスをもらう場を設けたりすることも有効であるとわかった。本単元では、願いごとにグループを編成したが、使用する材料や素材ごとのグループではどのようなかかわりが生まれるのか、今後実践していきたい。

A児のいた「形グループ」の模造紙には、「トイレットペーパーだとシャボン玉はできない。」と書かれた水色の付箋が貼られていた。その付箋を用いてのグループでの相談タイムでは、「最初は大丈夫だったけど、トイレットペーパーが途中からぐにやぐにやになってしまった。」「トイレットペーパーは紙だから、だめなんじやない？」と話し、道具の素材の性質にも目を向けて話し合うことができた（資料5）。しかし、同じグループの中では、A児の作りたい数字シャボン玉作りにつながるようなアドバイスは出されなかつた。

そこで、資料4のイメージ図を掲示し、他のグループの友達ともそれぞれのシャボン玉のイメージを共有することにした。そして、他のグループにアドバイスしたいことが見つかった場合には、黄色の付箋に書くことにし、それぞれが描いたシャボン玉のイメージ図にその付箋を貼るようにした。すると、子どもは「アドバイスしたいことある！」と何枚も付箋を書き、友達のイメージ図に貼っていった。自分の見つけたことが友達の役に立つかもしれないとわくわくしていたのだ。

A児の描いた数字シャボン玉のイメージ図にも、「ガラスにつけたら、かたちになるかもしれないよ。」「てをしゃぼんえきにかけて、てをさんかくにして、かぜをまつと、すうじの『1』になるよ。」という友達からのアドバイスが書いてある付箋が貼られていた（資料6）。

その後の活動では、友達からのアドバイスをもとに、数字シャボン玉を作ろうと試行錯誤するA児の姿があった。アドバイス通りにガラスにシャボン玉をくっつけてみると、くっついたシャボン玉が滑り落ちてしまうことに気付いたA児は、今度は平らな机の上に数字を書くようにシャボン玉を吹き、くっつけることで、数字シャボン玉を作ることに成功した。つ

### (3) 目的を意識させたふりかえり

ふりかえりの時間には、授業を振り返って活動の満足度を3段階で自己評価し、その根拠を書くワークシートを準備した（資料7）。そうすることで、子どもは自分自身の目的に対してどうだったか、視点をもって振り返ることができると思ったからである。

資料1のA児のふりかえりには、「自分がつくりたかったシャボン玉ができたかどうか」「次、どうすればできると考えるのか」という視点で書かれてあり、目的に対するふりかえりから、次時の目的やその方法について考えることにつながっていることがわかる。このことから、視点を明確にもって自分の活動を振り返ることが、活動の成果をより実感することや、次時への意欲や見通しにつながっていることがわかった。

また、ふりかえりでの自己評価を色別シール（満足：ピンク色、まあまあ：黄色、あんまり：水色）で貼り表し、一覧表にした（資料8）。そうすることで、単元を通しての自分の成長をも振り返ることができると考えたからだ。

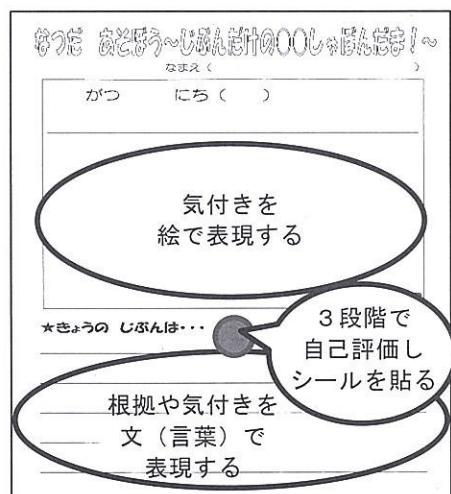
A児の欄には、ピンク色→ピンク色（資料1）→水色（資料2）→ピンク色（資料3）とシールが貼られていた。A児は「数字シャボン玉」にこだわりをもって活動し続け、最終的には自分の作りたかった数字シャボン玉を作ることができ、大満足で学習を終えた。

しかし、子どもの中には自分の作りたいシャボン玉を作ることができずに学習を終えてしまった子どももいる。その一人であるB児は、一覧表を見ながら、「自分の作りたかった『人が入れるくらい大きなシャボン玉』はできなかったけど、いろいろやってみて、毎時間新しいことが発見できたから、ずっとピンクだった。」と満足そうな笑顔で話し、自分の学習を振り返った。B児は「自分が作りたかったシャボン玉ができたかどうか」の視点だけではなく、「自分に新しい発見があったかどうか」という視点、そして「それが毎回かどうか」という、単元を通して振り返る視点からも自分の成長を実感していたのだと考える。「自分に新しい発見があったかどうか」という視点では、ゆっくり吹くと大きなシャボン玉ができること、シャボン液の膜が張らないとシャボン玉はできないことなどをふりかえりのワークシートに記述していた。B児の作りたいシャボン玉はできなかったが、その過程でシャボン玉の性質にたくさん気付くことができ、それらを新しい発見ととらえ、自分の成長として自覚していたのだ。

これらのことから、1時間の自分の姿だけでなく単元を通しての自分の姿を振り返る際にも、視点をもって振り返らせたり、シールを一覧表にして可視化したりすることは、子どもが自分の成長を実感したり、満足感や達成感を味わったりするのに有効であると考える。今後は、一覧表から同じグループの友達のふりかえりの様子を知り、友達へのかかわり方を考えるなど、一覧表のよさを生かした効果的な活用法を考えていきたい。

### 今後に向けて

「子どもがいくら気付いていても、教師がそれに気付かず、子どもの気付きを拾うことができなければ意味がない。」ある先生からいただいた言葉である。本実践ではA児の学ぶ姿を中心に考察することで、学ぶ楽しさを味わうためにはどんな手立てが有効であったかを検証することができた。今後は、このA児の姿をもとに、クラス全員が学ぶ楽しさを味わいながら主体的に活動し、気付きの質を高めることができるよう実践を積み重ねていきたい。



資料7. ふりかえりに使用した  
ワークシート

なつだ	7	14	14	15
あそぼう	14	14	14	15
じぶんだけの OOしゃぼんだま！	14	14	14	15
21				
22	A児			
23				

資料8. ふりかえりシールの一覧表